

発表題目：日本語における自他動詞の習得の必要性

## 発表概要

### 1. セミナーでの発表内容

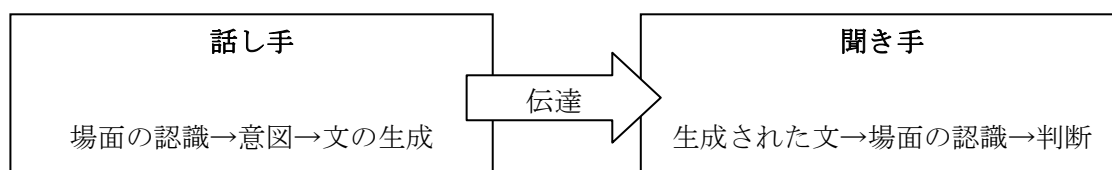
- ①修士論文まで
- ②修士論文からの **Research Question**
- ③研究背景
- ④研究内容
- ⑤今後の課題

### 2. 発表内容概要（番号は 1 の発表内容と対応）

①日本語の自動詞・他動詞は形態的にも意味的にも似通っているため、「(なかなか開かないビンが) やっと開けた」のような発話をしてしまったり、いつ・どこで・どのように自動詞・他動詞を使い分けたらよいか分かりにくいいため、日本語学習者にとって日本語の自動詞・他動詞の習得が難しい学習項目の一つである。特に中国語母語話者にとっては、中国語に自動詞・他動詞の形態的区別がないため、より一層習得が難しい。修士論文(「**相対自動詞・他動詞の習得状況の分析—自他選択の判断要因から—**」2009 地域研究研究科)では、中国人日本語学習者に対してビデオを用いたテストとそのフォローアップインタビュー(テストに答える際にどのように自動詞・他動詞を使い分けられたのかを聞いたもの)を行い、上級日本語学習であっても「直前の助詞が『を』であれば他動詞、『が』であれば自動詞」という形態的な判断を行っていることを明らかにした。

②しかし、日本語の自動詞・他動詞には「授業を終わる」や「席を替わる」などのように「を」格を取る自動詞も存在することなどから、日本語の自動詞・他動詞は英語の直接目的語の有無のように形態的に二分できる区別はないとの指摘を紹介した。また、形態的な判断だけで「『を』であれば他動詞、『が』であれば自動詞」と判断してしまうと、聞き手になったときに相手の発話の意味を取り違えてしまい、相手の意図を正しく理解できないと問題が起こる。そのため、本研究では「自他動詞の意味からの理解を促進させ、学習者の意図による使い分けが可能になる教授法を導き出す必要があるのではないか」という研究課題を提示した。

③細川(2002)では、「話し手から聞き手への伝達とその理解」には以下のような一定の順序があるとした。



話し手がメッセージを送る際には、まずは場面の認識が必要であり、その場面の認識が異なれば、当然、そこでの意図や表現も異なってくる。この場面の認識に対応するのが、認知言語学の基本的な概念の一つの〈事態把握〉である。〈事態把握〉とは「話者がある出来事をどのような違ったやり方で認識するかということであり、同じ〈コト〉であっても認識が異なれば、それを反映した言語表現でも異なった意味が産出される」(池上 2006)と捉えるため、日本人と文化的背景の異なる日本語学習者であれば、当然、〈事態把握〉の異なりも存在し、その異なりは自動詞・他動詞という言語表現にも表れると考え、研究課題である「自他動詞の意味からの理解を促進」に対する有効な手法としてこの〈事態把握〉を採用した。

④そして、「作文添削における事態把握の相違」「ビデオを使用した同一映像のストーリーテリングによる事態把握の相違」「ビデオを使用した同一映像による書き言葉調査」の3つの調査を設定した。「ビデオを使用した」2つの調査は共同研究予定として準備中であるため、本発表では「作文添削における事態把握の相違」について触れた。「作文添削における事態把握の相違」の調査方法は、日本語学習者によって書かれた作文を日本人・日本語学習者に提示し、それぞれにその作文を日本語の正誤に関わらず、気になった部分を添削してもらう。その修正部位を「お茶が入った」と「お茶を入れた」のどちらに修正するのか、のように動詞のコントロール性から分析し、日本人・日本語学習者の〈事態把握〉の傾向性を導き出す方法で行う。現在、データ収集中のため、本発表では調査方法のみに留めた。

⑤最後に、「今後の課題」として今後、考えていきたい点についても触れた。それは、Triandis(1975)が提唱した「アイソモーフィックな帰属」(isomorphic attribution) というもので、「個々の異文化成員が持っている内在的文化を理解し、状況や行動を同様に認識することで円滑な人間関係をもたらす」というものである。つまり、文化背景の異なる者同士でも自分自身の枠に当てはめて物事を判断するのではなく、「相手と同じように生まれ、育ってきたならば、同様に物事を考えるだろう」という認識が必要であるという考え方である。この観点から日本語学習者の認知的異なりを見つめることで、文化背景の異なる者同士の相互理解の教育が可能となるのではないかと考え、今後、この点に関

しても考察していきたいと述べ、発表を終えた。

### 3. 質疑応答

指定討論者の二名の方からは「具体的に教育場面でどのように導入していくのか」「文法と認知的な能力とをどのようにバランスを持っていくのか」という質問をしていただいた。「具体的に教育場面でどのように導入していくのか」に関しては、まずは日本人・日本語学習者の認知的傾向を明らかにすることが目下の研究であるため、現段階で具体的な答えは出せていないこと、「文法と認知的な能力とをどのようにバランスを持っていくのか」に関しては、文法教育も決して不要なものではないので、その文法項目がいつ・どこで・どのように使われるかという点と絡ませながら同時に教育していくことが大切であると、答えさせていただいた。どちらの質問も実践場面を想定した最終目標につながるものでもあるので、今後もこの点は視野に入れて調査を続けていきたいと感じた。

他のプログラム生からは、「現在、行っている作文を用いた調査について対象とする日本人・学習者のレベル等の制限はあるのか」について、ご質問いただいた。この点に関しては、データ収集の際には制限を作らずに収集を行っているが、調査用紙に日本人・留学生との接触頻度や海外滞在歴・日本語学習期間等を尋ねる項目を用意しているため、データ収集後にその項目ごとにデータを見ることも可能であると述べさせていただいた。しかし、本研究は文化的背景を主軸としているので、国ごとや文化ごとでの際に注目することが主になる点になるであろうという点も付け加えさせて頂いた。また、IFERI 研究員からも使用教科書による差や引用文献の信頼性へのご指摘を頂き、今後の発表活動にも生かせる有益なアドバイスを頂いた。最後に青木教授から社会心理学との融合の可能性や場面と言語構造の関係などの重要性に関するアドバイスを頂いた。今後はさらに他分野との関連性を広げられるように考えたい。